

# 槐

かい

岡井省二創刊

令和2年9月号

令和二年九月一日発行 第三十巻第九号 通巻第三五二号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



# 天涯

高橋将夫

秘め事のくだりは紙魚に食はれたる  
愛憎の糸が織りなす辻が花  
両性の憂ひを宿す梅雨の月  
絶海の女護ヶ島の青大将

オアシスが遠い真夏の夜の夢  
並びたる円座ソーシャルダンス  
外出の自粛と無縁かたつむり  
身の内の菌と共存半夏生  
三解脱門を抜けたる恋螢  
付度は鰻のやうなものであり  
天涯や百畳の間に端居して

# 槐安集

加藤みき

青嵐 天守に動く人の波  
彼の人もこの人も逝き牡丹咲く  
子鳥に鳴いてみせたりいくたびも  
さがつてもカメラはみだす花芭蕉  
数珠玉を飲み込みさうに増水す

中島陽華

階段のニャンにも言う老いの春  
うららけし京は白川につき餅  
現身や愛染かつら臙めく  
着信は火の接吻よおらが春  
花散るや岩壺を離るる竿の先

竹内悦子

一輪が咲き水無月の曼陀羅華  
飴囃むや雨の朝のあめんぼう  
鉋屑ひらひら大判小判草  
一切は通りすぎたる青嵐  
鏡中に扇子置かるる省二の書

雨村敏子

ハミングの声水いろに首夏に入る  
とりどりに夏至の天地の音聞こゆ  
一間の間合ありけり緋の牡丹  
晩節を朱夏のひかりに晒しける  
水の上の影流れゆく祓ひかな

近藤喜子

蜻蛉生る星の未来やもつと青し  
夏草やほつたらかしの強さあり  
大蟻の何かたくらむ黒光り  
龍神の乱心したる大出水  
螢火の点滅あれは言葉なり

柳川晋

ダークサイドウィルオープン解夏倪の偈  
蟄蠅やテロルは象の耳の中  
人生劇場をんなの道も蛇の道も  
当代の蠅虎はグルメにて  
裏切の記憶ハンカチ落しかな

瀬川公馨

杜若無調の音の流れたる  
卓の上に屈の雅ありにけり  
紫のツタンカーメン豌豆  
きのふけふチガヤの花の呆けたる  
水田べりに苗の束あり明日あり

熊川暁子

田水張り矛盾が浮上してゐたる  
紅きバラ捧げ黒人霊歌かな  
子午線をうるうる蛸の遊行かな  
点滅はいのちの言葉草螢  
滴りやここより河の物語



江島照美

蛇年の女の衣は蛇の衣  
火蛾乱舞闇路の果は狂ひ死に  
危ふくも墓出歩くや夜の街  
クラスタ―必要なのよ小判草  
象徴の杖にまきつく蛇悲し  
アスケレヒオスの杖

岩下芳子

初蛩試みに青発信す  
蘭鏝のもの言うてをるおちよぼ口  
青葉闇といへども光差すところ  
猫の眼の蠅取蜘蛛を追うてをり  
前線や押しつ押されつ梅雨あがる

寺田すず江

聞き役になりて頬張る豆の飯  
孤独が好きよ薄羽かげろふ翅たたむ  
植田風祈りをのせて渡りゆく  
人声も濡らしてをりぬ濃紫陽花  
揚羽舞ふ伝へたきことあるやうに

有松洋子

こきとなる骨を身に持ち更衣  
長靴の赤の小ささ迎へ梅雨  
青梅雨や部屋に墨の香残りをり  
梅雨の句会たたまれて立つ傘の美し  
わが鬱を真向かひに置き草矢射る

田中信行

ジタン吸ふ男居た店夏灯  
物語紡ぐ五月雨恋の歌  
夏蜜柑広がる酸味昭和かな  
アルパカの円らな瞳聖五月  
人生のアルバムめくる桜桃忌

近藤紀子

誕生日桜桃のジャムの赤さかな  
くり返し聞くコンドルの歌青葉風  
竹皮の草履の音と母のこゑ  
月山の水参らする梅雨晴間  
植田に映る街の夕景はんなりと

岩月優美子

竹の皮脱いで世相の風を知る  
びつしよりの寝汗私は生きてゐる  
閃きの失せてひたすらパセリ噛む  
アナログとデジタルの間の蚊遣かな  
薫風にこちこちの頭を解しけり

竹中一花

涼しさや一力の灯も簪も  
紅ばらの束をバケツに明日を待つ  
おうい雲赤鱗の呼ぶ夏の雲  
麻の葉の風に乗り来る父のこゑ  
昭和史の八月白き花を買ふ

前田美穂子

伊賀甲賀の境の池や菱の花  
火蛾舞へり昔忍者屋敷とて  
水位計の紅き印や水葵  
初恋の話とび出すさくらんぼ  
朝焼の雲二筋に分かれをり

吉田順子

一水の音より螢の道となり  
梅雨晴間諸鳥のこえ生き生きと  
青空にこころ放てり石鹼玉  
巢立鳥ざわざわざわと大樹かな  
夏蝶湧く無人の駅の一樹かな

中田禎子

祇園会の静なりけり地球病む  
海青し鳥大空にケルン積む  
シーサーや貝風鈴に捧るこ糸  
どこからも達磨の睨む円座かな  
生臭きにほひ螢の飛びにけり

# 槐市集

高野昌代

天体ショー心に光をサンガラス  
六地藏の地空の焦げ目や苔の花  
名前をと消してまた書く一年生  
校名を凶案化したる藍浴衣  
日輪の夕焼といふ忘れもの

田中美恵子

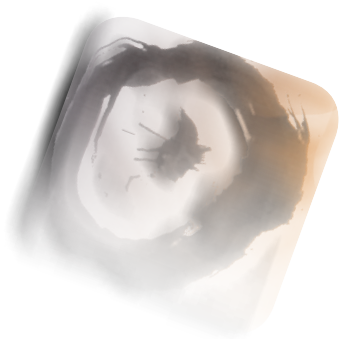
カーファンの吾子に乳やる田植かな  
農道を犬の走るや麦の秋  
街並は江戸の面影茄子の花  
蛇苺遠く山越えダムに出る  
北大の楡の木陰の黄菅かな

竹村 淳

豌豆の莢果手先を弾け飛ぶ  
マスクしてマスクの街のアマリリス  
一滴も絞る急須の新茶かな  
父の日の晩酌畑の胡瓜もみ  
透かし百合感染滅を大空へ

時 澤 藍

胸のすく話は聞けずソーダ水  
一口にアヂサイなれど多種多様  
夏草や我もしぶとく生きてをり  
病む星の心撫で行く青田波  
侮ればしつべ返すや茄子のとげ



中 貞子

今日もまた床を磨きし素足かな  
両の手で宥めし茄子を糠床へ  
藤の蔓空に遊びし大南風  
更衣馴れぬし道も新しき  
生き様をリセットしたき半夏雨

中島久生子

海の景一人じめして夏に入る  
夏の夜やユーチューブで聞くわが校歌  
花が好きバラ百本のバースデー  
パナマ帽亡夫の姿を棚の上に  
夜涼はふるさと石見の漁火と

中西厚子

夏至の波一際高く打ち寄せる  
トンネルの出口の先で夏が呼ぶ  
薄暑の夜白紙のノート眺みをる  
梅雨寒し株価の暴落気に掛かる  
走りたい犬遅歩きの人暑気

中島昌子

背に跳ねるポニーテールや青楓  
連作の千年の田や青田波  
万緑の空間へジェットコースター  
風鈴や醬の匂ふ蔵の町  
一匹の蚊の襲撃にてこずれる

橋本順子

六月の風になりたる駿馬かな  
青田道来たりて朱印受けてをる  
鉄漿蜻蛉水の匂ひを運びけり  
蟬生まれ羽にさみどり差し始む  
青梅雨の森の切株息をして

平野多聞

時空越へ獣道なる栗の花  
「放浪記」命を惜しむ落し文  
合掌の指間を抜けて夏の月  
老僧の声の涼しき奥の院  
那智の滝飛沫に開く夏椿

## 槐 集

## 高橋将夫選

大阪 藤田美耶子

大滝に洗はれ削がれゆくこころ  
ウイルスの一撃ふいに薔薇崩る  
世情には疎いままなる金魚かな  
芍薬の孵化するごとく開きけり  
濃紫陽花水の器となる朝  
受粉する小玉西瓜や子守唄  
樵の水からだに満たす山開き  
竹を伐る僧の気合や山動く  
半夏生のひと日睡魔に付かれける  
水無月の夢の緑となりにける  
遙かなる潮騒きくや濃紫陽花  
はんなりと年輪はおり更衣  
遠ざかる人まぶしけり蓮浮葉  
心太もう急ぐことなくなりて  
青鳶や虚実をからめ吾が道を

夏至の雨羽音さやかに聞こえけり  
佛法僧生きよ生きよと鳴きにけり

枚方 井上 静子

六月の小屋のうしろの影の無き  
あつち向いてホイ指先にある金魚玉  
寺の鐘の音色いつしか梅雨に入る  
念仏に響む波音一遍忌  
月の客弥陀の法衣を正しうす  
昼寝覚明日の太陽見てきたり  
炎天を曲がればかの世の見えてきし  
身を焦がす螢は月に住めぬなり  
地球一面わがものに草茂る  
子子や浮き沈みして明日をいく  
土用芽の天地突きくる力かな  
天も地も覆はんとして蔦茂る  
かくしたき恋の一つも落し文

大阪 平野多聞

岡崎 柴田 靖子

# 銀河往来 高橋将夫

ウイルスの一撃ふいに薔薇崩る 藤田美耶子  
新型コロナは人の命を奪い、経済を壊し、文化まで変えてしまふ。まるで華麗な薔薇を崩すように。

〈濃紫陽花水の器となる朝〉の句は実に美しい。

竹を伐る僧の気合や山動く 中 貞子  
「山動く」のデフォルメが効いていて、竹を伐る僧の気合がどれほどのものだったか想像に難くない。  
一転して、〈水無月の夢の緑となりにける〉はまことに詩情豊かな一句。

青蒿や虚空をからめ吾が道を 阪倉 孝子  
虚空などという摸たるものは絡めてしまい、とにかく自らの道を信じて、自らの道を進むのがなにより。  
〈はんなりと年輪はおり更衣〉の句の「年輪はおり」はこの作者ならではの感性。

佛僧生きよ生きよと鳴きにけり 井上 静子  
この仏僧が言うように、何が何でも生きなければ。  
〈六月の小屋のうしろの影の無き〉は深みのある一句。

念仏に響む波音一遍忌 平野 多聞  
一遍上人は踊念仏を民衆に勧め、諸国を遊行。唱える念仏は波のように人の心に広がっていったことだろう。

土用芽の天地突きくる力かな 柴田 靖子  
「天地突きくる」というデフォルメされた表現に土用芽の力強さが凝縮されている。

子子の一途に願ふ運と富 三木 亨  
たかが子子。その子子にも野心は有るといふ。運と富は誰もが願うところ。

カラコロと繭が尻をあやしをり 出利 葉孝  
繭を振ったら繭の中で死んだ蛹の音がした。「繭が尻をあやしをり」は死んだ蛹を悼む気持の表われなのだろう。

おしやべりは特効薬なり薔薇の雨 久保 夢女  
確かにおしやべりは特効薬。とりわけ女性にとつてはそうだろうと思う。

時の日の時ゆるやかや身ほとりに 中島 昌子  
身ほとりを時間がながれて行くという感性に惹かれた。

卯の花のこぼるる鄙の売家かな 阿部さちよ  
「卯の花」と「鄙」、一軒の売家がなんと詩情豊かに詠まれている。

句会へと尾鱸を振りて梅雨晴間 高野 昌代  
新型コロナで2〜3ヶ月間休会した句会が再開。「尾鱸を振りて」に句会へ出かける作者の気持が如実に現れている。